

イラストレイテッド ミニマム創 内視鏡下泌尿器手術

木原和徳 著

＜書評者＞ 寛 善行（香川大学医学部教授・泌尿器科学）

ミニマム創内視鏡下泌尿器手術は後腹膜を主戦場とする泌尿器外科医の発想の賜物と言える手術法である。解剖学的指標に乏しい後腹膜腔を、層構造を注意深く意識しつつ疎な結合組織を押し広げた先に広がる予想外に広い手術空間、そして薄黄色の脂肪組織に包まれた標的臓器を同定した時の安堵感、これらは泌尿器科医が等しく共有するものである。木原和徳先生の考案されたミニマム創内視鏡下泌尿器科手術は、今静かに、しかし確実に実践する術者や施行を希望する患者を増やしている。

著者である木原先生は、この手術手技は根治的腎摘除術と前立腺全摘除術が2大基本手術操作で、この2つができれば泌尿器科のmajor surgeryはほとんどがミニマム創でアプローチ可能となると強調されている。私自身は前立腺全摘除術でしか施行経験がないが、おそらくその通りであろうということは理解できる。

初めてミニマム創で根治的前立腺全摘除術を施行したときのきっかけは忘れてしまったが、現在ではわれわれの施設の前立腺全摘除

術のおよそ80%が本法で施行されている。患者さんが術後なんとなく楽に離床されていく様子や、創部感染が少ないことなどを肌で感じたことが続いている理由のように思う。しかし、当初はこんな窮屈な気持ちで最後まで完遂できるのか、という不安が大きかった。

木原先生の考案されたPLES鉤®は当時入手できておらず、ノットスライド®のみで開始したが、細径金属吸引管を2本使用することでほとんどの手技が容易にできることに気がついてからは、一気にストレスがなくなったように思われる。本書では、木原先生自身が試行錯誤された末に考案された工夫が随所にちりばめられ、初めてミニマム創手術をトライされる方にもできるだけストレスのないように懇切に図説がなされている。と同時に、ミニマム創手術だけではなく、通常の開放手術や体腔鏡手術にも共通する重要な解剖学的事項も解説されていて、一般の手術書としても大変参考になるものに仕上がっている。

泌尿器科手術の多くは癌に対する手術である。癌の根治性に関す

る議論がなおざりにされてはならないのはいうまでもないが、外科的治療がますます低侵襲化する傾向は間違いない。他の外科系領域でも、ミニマム創手術と類似の発想・手法で「ミニラパ手術」「吊り上げ手術」「鍵穴手術」などといった名称で開発・研究が進行している。体腔鏡下手術もロボットの導入や立体視の可能な内視鏡の登場などで一層の進化をとげつつある。今後、低侵襲手術がどのような方向へ進むのか、最終的に無創手術のような形態に一極化していくのか、いまだ予測はできない。また、ラパロとミニマム創の二股状態の、私のような優柔不断なものには、ロボット体腔鏡手術も大変魅力的であるのは偽らざるところである。しかし、現時点ではあまりに高価であるのも事実で、それに見合うほど患者さんにメリットがあるのか、と問われると誰も明確な証拠は示せないのが事実であろう。ミニマム創手術はちょっと「窮屈」という欠点はあるものの、「安い」「安全」「低侵襲」という長所を多くの患者さんに享受させてあげるため、本書が大いに活用されることを願ってやまない。

●A4 頁152 2007年
定価14,700円
(本体14,000円+税5%)
[ISBN978-4-260-00481-7]
医学書院刊